

資 料

オンライン教材「発達支援の場の雰囲気づくり」を活用した 対話型ワークショップ

—発達支援者のコミュニケーション力育成プログラムの実践—

Interactive Workshop Using the Online Materials “Fostering a Warm Atmosphere in Developmental Support”:

A Practical Approach to Enhancing Practitioners’ Communication Skills

長岡 千賀

追手門学院大学経営学部

Chika NAGAOKA

Faculty of Management,

Otemon Gakuin University

あらまし：本稿では、オンライン教材「発達支援の場の雰囲気づくり」を活用した対話型ワークショップの取り組みを紹介する。本教材は感覚統合療法を専門とする研究者との共同研究の成果を基に作成されたものであり、これを用いて中堅者と初心者が対話を重ねながら相互に理解を深める集団学習を通じて、発達支援の場において子どもとの関係性を築くためのコミュニケーション技術の習得を目指す。短縮版ワークショップを小学校教員向けに実施した結果、経験共有による新たな気づきや省察が促され、学習効果が高まる可能性が示唆された。今後、さらにワークショップを開催するとともに、公認ファシリテーター養成講座の開設を含め、発達支援者育成プログラムとしての継続的な活用を検討する計画である。

キーワード：自閉スペクトラム症、子ども、グループ討議、熟達

1. はじめに

本稿では、研究プロジェクト「自閉スペクトラム症児の療育における相互作用のマルチモーダル分析」(JSPS科研費 20K02689)の成果を基盤とし、実際の事例をもとに作成されたアニメーションを活用した、発達支援者向けオンライン教材「発達支援の場の雰囲気づくり」(登録制、図1)^[1, 2]および関連するワークショップの概要を報告する。

まず、このオンライン教材の「はじめに」の文章を引用し、研究やサイト制作の意図を確認しておきたい。

このWebサイトについて

作業療法場では、お子さんが、セラピストと一緒に遊んで遊びについて考え、とても楽しそうにしていることがあります。では、このときのセラピストは、お子さんの何を見て、何を・どのように考え

て、お子さんとどのように関わったのでしょうか。

この「何を見て、何を・どのように考えて」「お子さんとどのように関わった」かについて、実際の事例をもとにつくったアニメーションと、その事例のセラピストへのインタビュー、行動や発話についての定量分析を使って解説したのが、本サイト「発達支援の場の雰囲気づくり」です。

■プロジェクトの問題意識

本サイトのもとになっているのは、実際の事例について認知心理学的観点を踏まえて、認知心理学者と作業療法士の共同で進めてきた研究プロジェクトでの研究成果です。

作業療法がうまく実践されているとき、セラピストは、(1) その場の状況と子どもの状態を捉えて楽しい遊びを思い付き、子どもに適度なチャレンジを提供するために(2) 子どもと楽しいやり取りを

しています。

この(1)子どもの状態を捉えて楽しい遊びを発想することには、感覚統合の理論が基礎として関わっています。しかしながら、セラピールームで実際にお子さんを前にしたとき、そのお子さんと感覚統合理論を結びつけて考えるのは、簡単なことではないように見えます。なぜなら、お子さんはたいてい、大人の予想しない動きや反応をするので、特に身体を大きく動かす場合、セラピストは物理的について行って安全を確保するだけで大変で、それと同時に感覚統合理論と結びつけて素早く考えるのは認知的負荷の非常に高いことだからです。しかしそれなのに、これへの対処の仕方について詳しい解説を聞いたり1つ1つ細かく指導を受けたりする機会はなかなかないようです。

また、(2)子どもとのやり取りも単純ではありません。もし子どもが、自分の感覚や考えを、多くの人が共通で理解できる言葉で、整理して話してくれば、そして、セラピストの言葉にいつも関心を持って、協力的に動いてくれるなら、セラピストの仕事は非常にシンプルになることでしょう。しかし実際は、子どもは自分が思っていることを、共通の言葉ではなく、自身が表現できる唯一の方法でセラピストに伝えるかもしれません。それは、自傷やパニックといった問題行動や、お気に入りのコマースシャルのフレーズといった脈略のない言葉を使うことかもしれません。また、子どもはセラピストの言葉に関心を示さない、または理解していないように見えることがあるでしょう。このような状況にセラピストがとまどうことはよくあるようです。そして、このようなコミュニケーションの不具合への対処は、感覚統合療法を実践する上で重要な「アート」の部分であり、臨床では常に話題となることです。しかし、感覚統合理論の「サイエンス」の部分に比べ、どのような知識や技術が必要なのかは具体的に議論されているとは言えません。

このように、感覚統合理論を作業療法で用いるには、子どもとの関係性の土台をつくるコミュニケーションが不可欠で、セラピストにはコミュニケーションについての知識や技術が必要だと考えられます。けれども、これについて論理的に詳しく説明・解説される機会が少ないようです。それが原因で作業療法の初心者が技術を向上させるのが難しい状態



図1 オンライン教材トップ画面

にとどまっているのではないかと私たちは考えました。

そこで私たちは、私たちがこれまで収録し分析してきた実際の事例のアニメーションと、その事例を行ったセラピストへのインタビューや、行動や発話の定量的な分析を使って、「何を見て、何を・どのように考えて(上記(1))」「お子さんとどのように関わった(上記(2))」かについて案内するためのサイトを作ることになりました。認知心理学的観点からの分析を含めて展示することによって、作業療法に必要な、子どもとの関わりについての知識と技術を知るきっかけにいただければと考えたのです。

本サイトが、皆さんの、そして皆さんの周りの支援者さんたちの、子どもとの関わりが今よりもっと良くなるきっかけになれば幸いです。

2. 現場が抱える課題とその解決策

2.1. 課題の背景

支援の実践に関して専門学会主催の講習会も開催されているが、参加に関わる時間的・場所的制約に関する課題があり、これらの制約は、学習者がコミュニケーションスキルを効率的に、かつ自分のペースで向上させる機会を制限する要因であった。これに対して、オンライン教材は、時間的・空間的制約が小さいという点で大きなメリットがある。

ところが、本教材を約1年半運営したところ、本教材の課題が浮かび上がってきた^[2]。本教材には、動画を見て問いに答えて、回答を送信するシステムがある。最初のシーンは相対的に簡単な問いを、その直後のシーンではセラピストとのインタラクションを解釈する相対的に難易度の高い問いを設置した。このシステムによる学習者の学習状況を分析したところ、特に経験の浅いセラピストは、最初のシーンに関する問いには回答を送信するものの、その直後のシーンに関する問いでは回答の送信が減少する傾向にあることが示された。30年以上の経験を有するセラピストではこのような傾向は見られなかったことから、経験が浅いセラピストにとって、子どもとの関わりの肝要部分の思考を要求される場面が困難であると推察された。

専門学会主催の講習会や発達支援に関わる施設の職場内での指導においても、学習者が学習に難しさを感じる局面は少なくない。熟達者の指導を受けた中堅者が一時的に「自分はだめかもしれない」と自信を失いそうになることもある。また、病院等の職場内で、初心者は中堅者の指導に対して「本当かなあ」「今の状況には当てはまらないのではないかと疑うなど、素直に受け入れづらいことがある。結果として、子どもとの関わり全体の底上げが進みにくい構造がある。

2.2. 解決策の提案：中堅者と初心者の集団学習

このような複層的な課題を踏まえると、中堅者と初学者が熟達者の思考プロセスを共に学ぶ集団学習の仕組みが解決策となると考えられた。

中堅者と初学者による集団学習によって、中堅者としては、熟達者の思考プロセスを改めて吟味し、「通訳」して初心者に伝えることで、自分自身のコミュニケーションや理論理解を整理・再認識する効果がある。それが自信につながり、結果的に指導力や実践力の向上に寄与すると考えられる。

初心者としては、中堅者による「通訳」を通じて、自分のレベルや状況に合わせたアドバイスが得られるため、「難しすぎる」「自分には無理だ」という固定観念を乗り越えやすい。他者（中堅者）の経験談や視点を聞くことによって、新たな挑戦へ向けたモチベーションが高まると考えられる。

教材に示される具体的な事例と熟達者による解説を中心に議論することを介して、熟達者と中堅者と初心者が、抽象的な理論だけではなく、「この場面でもう対処するか」を共に考える場が形成される。考え方が共有できることで、認知のズレを修正し合い、実践知をより深く共有することができると期待される。

3. ワークショップの実施概要

先の節で示したように、中堅者と初心者がともに学ぶ集団学習の仕組みは、オンライン教材の課題を補い、現場でのコミュニケーションスキルを底上げするうえで有効と考えられる。ここでは、そうした集団学習を具体的に形にしたワークショップの設計と実施概要について報告する。

3.1. ワークショップのねらい：対話型学習

教材を活用し、発達支援や教育の実践者同士がアニメーションを共に見て対話的に学ぶ場を提供することを目的とする。特に中堅者と初心者が同じグループで取り組めるように設計することによって、両者の学習効果を最大化することを狙う。すでに述べたように、中堅者は初心者に解説する過程で自分の理解を再構成でき、初心者は中堅者の解釈や熟達者の考え方を噛み砕いて学ぶことで、自身の実践に役立つヒントを得られると期待される。こうした対話的学習の場は、理論面だけでは補いきれない臨床の「アート」を共有・習得するために効果的であると考えている。

3.2. 想定される参加者

発達支援に携わる作業療法士や保育士、放課後等デイサービス・児童発達支援施設・療育施設のスタッフなど、子どもの発達支援や療育に関わる方々を主な対象としている。また、小学校教員など、教育現場において子どもとのコミュニケーションを実践的に学びたいと考える方にも有用である。参加者が自らの事例をビデオ撮影してワークショップ用に提供する必要はない。

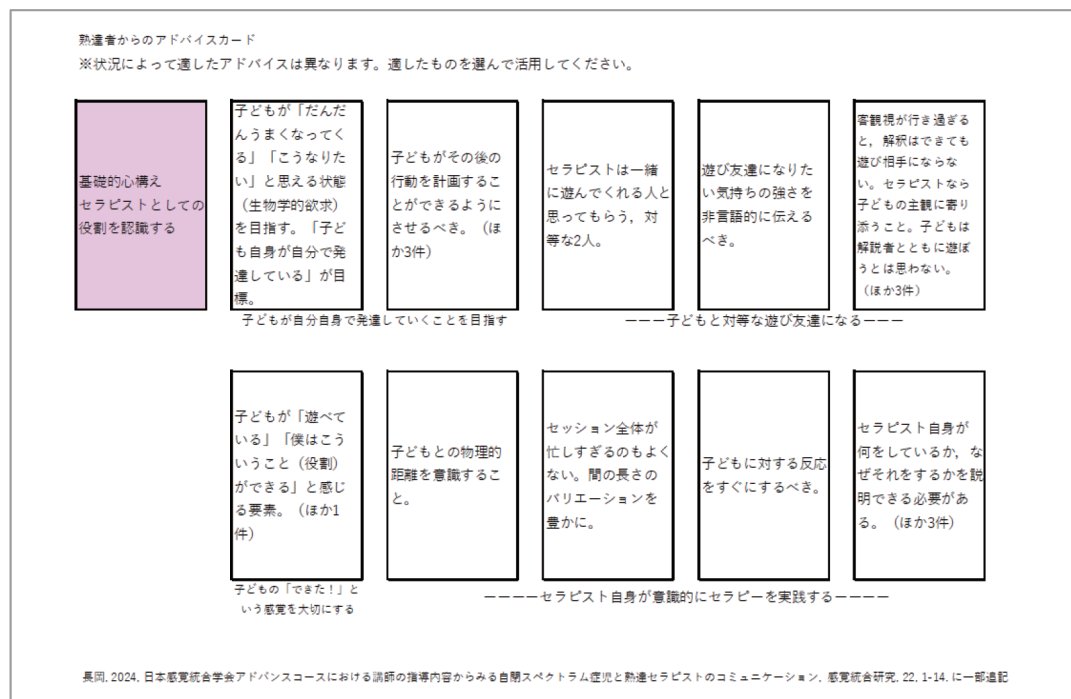


図2 アドバイスカードの一例

3.3. 実施形態

グループでの対話ワークを中心として、おおよそ次の手順で進める。なお、所要時間によって手順を変更することもあり、今後も改良を重ねる計画である。

1. (ワークショップ前) 個人でアニメーションを見て問いに答える
2. 考えたことを出し合う：全員でアニメーションを見ながら事前の回答を共有し、他者の視点を知ることで、子どもの行動への多様な解釈に触れる。
3. 熟達者からのアドバイスカード(図2)とワークシートを使って、話し合いながら、考えを深める：アドバイスカードは、中堅者向けのトレーニング講習で熟達者が示した言葉を掲載したものである。これを手がかりにして考えを深めていく。
4. 熟達者解説をしてみる：熟達者が実際にどのように考え、どのような働きかけを行ったかを解説する映像や資料を確認する。
5. 気づいたことを出し合う：熟達者解説を踏まえ、グループで追加の気づきを共有する。自分たちの考えがどの程度合致していたか、または異なる視点があったかを振り返る。
6. グループ発表：各グループが、気づいた点や今後の課題などを発表し合う。

このように、多様な観点を共有しながら学ぶ過程そのものが、本教材の狙いである実践的なコミュニケーション技術を体得する手がかりとなる。なお、アドバイスカードに示される熟達者の言葉は、専門学会主催の中堅者向け講習会で発された熟達者によるアドバイスであり、詳細な質的分析の結果^[3]に基づいて、局面に応じて使い分けしやすいように整理されてカードに示されている。これを介して中堅者と初心者が話し合うことによって、効果的に両者が考えを深め学べるようになっている。

3.4. 現在までの実施報告

2024年2月には、言語によるコミュニケーションが可能なお子さんの事例を追加し、教材の内容を拡充した。このときちょうど関西圏の公立小学校の教諭からのご要望を受けており、この事例を用いたワークショップを小学校教諭向けに開催した^[2]。ワークショップの感想として、例えば、「グループでの討議があることによって自分と違う考えを知ることができた」、「他の先生がどのように子どもに関わっているか知ることができてよかった」、あるいは、「グループ内で特に違う意見が出たわけではないが、他の先生も同じことを思っていることが分かってよかった」という声が寄せられた。こうした感想から、複数人で経験や

考えを語り合うことによって、参加者自身の考えについて省察でき、個人では得られない新たな気づきが得られることが示唆された。ただし、このときには開催時間が短かく、上記手順が省略され、討論が十分に深められなかった点が問題であった。2025年以降には、十分な時間を設定し、児童発達支援・放課後等デイサービス等におけるスタッフ向けに開催予定である。

4. 今後の展望

4.1. 公認ファシリテーター養成講座の開催

本研究で開発した教材とワークショップの手法は、学校や療育・支援事業所内で自主的に学習会を開催できる仕組みとして、今後さらに展開していくことを視野に入れている。その一環として、ワークショップを所属組織などで開催できる人材を育成する資格を取得する講座（公認ファシリテーター養成講座）の企画も進めている。これは、中堅者が所属組織で主体的に学習コミュニティを牽引できるようにする試みであり、初心者に対する効果的サポートばかりでなく、中堅者のさらなるスキルアップの環境づくりにも寄与すると考えられる。

具体的には、教材の使い方や議論のファシリテーション方法を学び、受講後参加者が、所属組織で同様のワークショップを企画・実施できるようにする構想である。公認ファシリテーター養成講座を通して、一つの施設・組織だけにとどまらず、地域や業界全体の支援者同士が集まる「学びのネットワーク」を形成することも期待される。

4.2. 本研究の意義と社会的インパクト

本研究の中心には、子どもとの関係性の土台をつくるためのコミュニケーション技術（アート）を、認知心理学の視点を踏まえて分かりやすく伝えるという発想がある。子どもとの関わりの中で専門的知識を用いることができるようになるには、従来の座学中心の教育だけでなく、実践者同士の情報共有や経験の蓄積が不可欠である。本研究で示した教材とワークショップの枠組みは、そうした現場ニーズに応える一つの具体的な解決策となりうる。

さらに、公認ファシリテーター養成講座のような体系立った支援者育成プログラムにより、発達支援・教育現場で実践者たちが「何を見て、どう考え、どう関わっているのか」をより深く共有できる環境を作るこ

とができる。これは、現場の質的向上だけでなく、子どもやその保護者にとっても、より安心できる支援体制の整備につながると期待される。最終的には、こうしたコミュニティ主導の学習モデルが広く普及し、子どもの発達と学びをより豊かにする社会的インパクトを生み出すことが本研究の長期的なゴールと言えるだろう。

付記

教材開発にご協力いただいた子どもとご家族の皆さまに心より感謝申し上げます。教材開発に際して、共同研究者の松島佳苗先生、加藤寿宏先生（関西医科大学）、吉川左紀子先生（京都芸術大学）、およびインタビューにご協力くださった小松則登先生（愛知県医療療育総合センター中央病院）、小西紀一先生（令和健康科学大学）に感謝申し上げます。ワークショップ企画に際して相談させてもらっている土屋左弥子さん（こどもセンターゆいまわる）、学習者にとって視覚的に魅力的で、かつ操作性の高いデザインをしてくださった城下敦子さん（みふくデザイン）にも感謝いたします。なお、本オンライン教材は登録制です。登録を希望される方は長岡（nagaoka[at]otemon.ac.jp; [at]を@に置き換えてください）までご連絡ください。

本教材の拡充とワークショップ開催、心理臨床の一般向け書籍出版（『カウンセリングのダイナミクス』, 2024）など、研究と社会貢献活動に2023年度は専念することができました。これは追手門学院大学による研究支援（サバティカル制度）のおかげです。本研究はJSPS科研費20K02689の助成を受けました。

文献

- [1] 長岡千賀, 松島佳苗, 加藤寿宏, 吉川左紀子, “発達支援者のコミュニケーション力育成のためのオンライン教材開発,” 日本感覚統合学会研究大会プログラム抄録集39th, 2022.
- [2] 長岡千賀, “発達支援者のコミュニケーション力育成—オンライン教材を用いたワークショップ開催報告—,” 信学技報, HCS2024-30, 124(19), 158-161, 2024.
- [3] 長岡千賀, “日本感覚統合学会アドバンスコースにおける講師の指導内容からみる自閉スペクトラム症児と熟達セラピストのコミュニケーション,” 感覚統合研究, 22, 1-14, 2024.